

宮川の風 第74号

平成31年2月1日(金)発行

宮川小学校校長室からのたより

私が25歳の初夏のある日の午前。場所は串木野市(今のいちき串木野市)。職場の電話に、妻から連絡がありました。「陣痛が始まったから、今から病院へ行きます」と。午後3時30分からの研修会に出席しなくてはならなかったため、すぐに病院に駆け付けることもできず、そわそわしながら夕方を待ちました。研修会が終わると、まっすぐ病院へ駆け付け、腰の痛みを必死に耐える妻の横でおろおろとしていました。そのまま夜の10時が過ぎたころ、看護師さんから「(産まれるのは)早くても明日の朝ですよ」と言われ、妻の両親と一緒にいったん家に帰りました。落ち着かないまま布団に入った深夜1時、突然の電話に跳ね起きると「産まれました(^o^)」と看護師さんの声。急いで病院へ走り、窓越しに初めてのわが子と対面しました。その時の感動は、いまでも鮮明な記憶として残っています。

28歳の冬の明け方。その日に大事な仕事があった私は、鹿児島市内の病院に入院している妻を気かけながら、鹿屋市の自宅で寝ていました。午前4時の電話に跳ね起きて「産まれましたよ。女の子ですよ」の声に、まとも出産に立ち会えなかったという無念さよりも、「(男兄弟しかいない自分に)女の子が産まれた」という感動でいっぱいになりました。

先日、学校保健委員会で「命の尊さ」について考えました。5・6年生と一緒に助産師さんからの話を聞きながら、それぞれの命は「奇跡の命」であるを感じつつ、若い頃の思い出を振り返る自分でした。助産師さんから、「うまれてきてくれてありがとう」という親の気持ち、子どもたちに伝えられました。

裏面の話をお読みください。

子どもは「生んでくれてありがとう」という気持ちをもつのです。それでこそ、尊い命であると言えるのです。

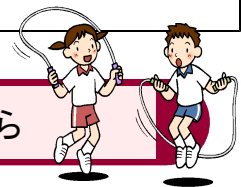
思いが伝わる作文

今週から来週にかけて、給食時間に子どもたちの作文朗読をしています。作文コンクールで入選した作文や新聞に掲載された作文を、その作者である子ども本人が朗読します。今週4人、来週も4人の子どもたちが朗読してくれます。

それぞれの作文にその子の思いが込められています。また、家族など子どもを取り巻く方々の優しさなども表現されています。それが、その子の声で伝えられると、感動が数倍になって胸に響きます。

給食時間の短い放送ですが、心が癒やされます。

ある日のできごとから



毎週木曜日の昼休みに行われています「なわとび大会」。体育委員会の子どもたちが主体となって、参加を呼び掛けたり、タイムを計ったり、記録をとって次の日の給食時間に結果の発表をしたりしてくれます。貴重な昼休みを係の仕事に費やす子どもたちですが、その責任感が嬉しく感じられます。

参加する子どもたちも、真剣に挑戦しています。高学年はもちろんのこと、中学年の子どもたちの健闘が光ります。そんな中、最近では、1・2年生の活躍も目立ち始めています。「あの子は(まだ)2年生だよ～。すごいよね」という声も聞こえてきたりします。最初は、なわを回すことすら難しかった1年生も、最近では、お兄さんお姉さんたちの中に入って、上手に跳べるようになってきました。

今週の木曜日には、持久跳びで5人の新記録達成者ができました。二重跳びでは、たった1人が新記録を達成しました。残り10秒では、体育館中でカウントダウンコールが始まり、達成の瞬間はたくさんの拍手が贈られました。

(文責; 鹿児島市立宮川小学校長 松永幸二)